

短編 10



交差



story by aono photo by mikio

六月の成田空港は霧雨で煙っていた。

「まだ7時前か」 入国手続きの列にならびながら、篠原慶一郎は腕時計をちらっと見た。

帰国には、ヨーロッパからの直行便で早朝成田に到着する飛行機を選んだ。

自分の番がくると、慶一郎はパスポートをグレーの背広の内ポケットから取り出し係員に手渡した。日本の入国係官はどうしてこう無愛想なのだろう。顔の筋肉を少しでも動かすと、給料が減らされるとでも思っているのだろうか。ヨーロッパではもっと友好的だ。公僕ならもっと愛想良くしろ、と心の中で毒づきながらおとなしくパスポートが返されるのを待つ。

到着ロビーは、まだ建物自体が目覚めていないかのように閑散としていた。電話でオートサービスを呼び出し、自分の車を空港出口まで運ばせる。買ったばかりのシルバーのBMWに乗り込んで、車をスタートさせた。

五年のローンを組んで手に入れたのだが、少々贅沢かもしれない。しかし、無理というわけでもなかった。

空港からすぐ高速に入る。アクセルをぐっと踏むとスピードを百二十キロに設定した。もう少し飛ばしたいのだが、時差ぼけの頭を考えると我慢する。

日曜の朝早く都心に向かう車は少ない。車を運転しながら慶一郎は今回の出張の成果を考えていた。

昨日契約を交わした球根の件はうまくいった。問題はスペイン産のオレンジだ。どうしても天候に左右される。不景気の昨今は消費者の目も一段と厳しくなっている。質と価格のバランスのとり方が難しい。

慶一郎の勤務先は丸の内にある大手の商社だ。ヨーロッパの農産物を任されてから、もう十年になる。悪くない人生だと思う。あるひとつの事件を除けば……。思い出して、ぶるっと身震いをした。

宮野木ジャンクションから京葉道路を經由し、原木インターを超えて首都高速7号小松川線に入る。もうオートドライブにするのは無理だが、通常の日曜日よりかなり空いている。

空気が重く感じられるのは気のせいかな。

じっとりと肌にまとわりつくようだ。

慶一郎は不安を覚えた。背中に寒気が走り、背広を脱いで半袖になった腕に鳥肌がたつ。

雨が強くなってきた。フォグランプをつけ、速度を緩めると、バックミラー越しに後方の車を確認する。一台の車も見当たらない。吹きつける雨で視界はますます悪くなる。ワイパーを最速にしても前方の車のテールランプさえ見えない。十年前のあの時のように、土砂降りの雨にゆっくりとシルバーの車が包み込まれていくようだ。

「ただいまー」

元気よくドアを開ける音と、ランドセルを投げだす音と一緒に、知樹の声が静まり返った室内に響き渡った。

「おかあさーん。いないのー？」

「知樹？」

「なんだ、いるなら返事してよ。ぼく、遊んでくるからね」と言うが速いか、知樹は飛び出していった。

章子はダイニングキッチンの椅子から物憂げに腰を上げると、息子が放り出していったダン度セルを拾い上げ、知樹の部屋の隅にそっと置いた。

新宿から私鉄で1時間ほどの市にある公団住宅の三階に、章子は夫の肇、息子の知樹と住んでいる。正確に言えば、一ヶ月ほど前までは。

最寄りの駅から歩いて二十分ほどの距離にあるこの住宅団地は、十八棟の七階建てのアパートで構成されている。十年ほど前に造成されたこの団地は、棟と棟との間が広くゆったいとしており、児童公園も多く、子供たちが野球やサッカーなどができる広場も整備されている。

団地を横切っている道路の両側には桜の木が植えられ、春には見事な桜のトンネルを出現させていた。

章子はこの団地が好きだった。椿、雪柳、連翹、辛夷、桜、ハナミズキ、と次々に咲いて行く花を眺めるのは楽しかったし、何よりも治安が良かった。

玄関のドアを開け放しにしている家も多く、子供たちは広場で自由に遊べる環境だった。知樹の部屋の窓から、サッカーに夢中になっている子供たちの歓声が、今も耳に飛び込んでくる。

ダイニングキッチンのテーブルに頬杖をついて、ぼんやりとベランダに目を向けた。

そろそろ、洗濯物を取り込む時間だわ、と自分に言い聞かせても、立ち上がる気になれなかった。

風に揺れている自分の下着類とTシャツ、息子の数枚の半ズボン、靴下、下着をぼんやりと眺める。

「あら、もう六時」

子供たちに帰宅を促すチャイムが団地中に鳴り渡ると、章子はあわてて洗濯物を取り込み始めた。六月の日は長い。明るさに騙されることも再三だ。

トン、トン、トン、と階段を駆けあがる軽い足音がする。

「じゃあねー」

「また明日続きやろうぜ」

「バイバイ」と、子供たちが其々の家庭に散っていく声が聞こえた。

「おなかすいたー。ごはんは？」

手足をドロドロにして知樹が勢いよく家に入ってきた。

「ごめんね、まだ出来てないの。すぐ作るからね」

元気な声を出そうと努力しながら、章子は返事をした。

「石鹸つけて手を良く洗ってね。お風呂場で足も洗っておきなさい」

「はい。ねえ、お母さん。お父さんはいつ帰ってくるの？」

「そうね。お仕事が忙しいみたいだから、いつになるかしらね」

「父親参観日には帰ってくるかな。お父さんたちが勉強を見に来る日だって、学校の先生が言ってたよ」

章子は心臓をきゅっと掴まれたような気がした。

「もちろんよ。お父さんが知樹の参観日を忘れるはずがないじゃない」

「そうだよ。幼稚園の時も一年生の時もきてくれたもんね」

「そうよ、大丈夫よ」夕食の焼きそばを皿に盛りつけながら、章子は自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

去年は知樹が学校に入学して初めての参観日に、夫婦二人で行ったんだわ。あれからまだ一年しか経っていないのに……。皿を手を持ったまま、ぼんやりと考える。

「お母さん、どうしたの？」知樹がいぶかしげな顔で章子を見あげた。

「あ、ごめんごめん。じゃ、食べましょうね」

近頃は、料理もカレー、スパゲッティ、焼きそばなど、子供向きの一品しか作らなくなってしまった。時にはそれさえも面倒になることがある。

これではいけないと思っても、どうしようもなかった。子供に悪い影響を与えてはいけないという思いと、もうどうでもいいと言う投げやりな気持ちとの間で、章子は精神的に不安定になっている。

焼きそばを一口やっとの思いで水と一緒に飲み込むと、箸を置いてじっと知樹の食べる顔をながめる。

「お母さん、もう食べないの？」

「おなかが空いていないのよ」

「じゃ、ぼく、もらってもいい？」

「いいわよ。たくさん食べなさい」

章子は知樹の皿に自分の焼きそばを移した。

夫の肇が家を出たのは、五月の連休最後の日だった。

連休の間、肇は時折知樹のサッカーの相手をしたり、近所の釣り堀に行く以外は、ビールを飲みながらテレビを見るか、ごろ寝を決め込んでいた。

章子も最初のうちは疲れも溜まっているのだからと、サービスに努めていたのだが、さすがに連休最後の日ともなると、いらいらしてくる。

三度の食事の支度、一日に何回も淹れるお茶やコーヒー、昼間からビールを飲み始めた時にはおつまみも出さなくてはならない。知樹が散らかしている部屋の片づけ、泥だらけになった衣類の洗濯は一日も欠かせない。

章子はくたびれていた。せめて連休の最後の日だけは三人で外食ぐらいしたい。私だって少しは楽をしたいわよ、不満が胸一杯に膨らんできた。

「ねえ、夕食は三人でファミリーレストランに行かない？ 子供の日なんだから」

章子はビールを片手にゴルフトーナメントをテレビ観戦している夫に出来るだけ明るい声で話しかけた。

「今日は凄く混んでるよ。どれだけ待たされるかわからないぞ。それに子供は母親の手料理が一番だ。知樹の好きなものでも作ってやれよ」

何かが章子の中で破裂した。

「あなたはいいわよ。そうやってゴロゴロして、テレビを見ていればいいんだから。私なんて休みなんか無いのよ。知樹の部屋だって毎日掃除をしなくちゃいけないし、洗濯だって。一回ぐらい外食したっていいじゃない。お隣だって今日……」

「自分が行きたいなら、そう言えばいいじゃないか。知樹のせいにするな。片づけだって本人にさせればいい。もう二年生なんだから」

「だって、あの子の片づけじゃぐちゃぐちゃで」

「じゃあ、自分の好きでやってることだろ。俺に当たり散らすな！」

章子はテーブルの上にあった木製の鍋敷きを夫に向かって投げつけると、わっと泣き出した。「ヒステリーは嫌いだ」そう言い捨てると、肇は隣室で背広に着替え、会社用の鞆をつかんで出て行った。

それからひと月が経つ。

焼きそばを食べ終わった知樹はテレビゲームに熱中していた。学校の友達に借りたと言っていたっけ。ぼんやりと画面を見ながら、章子は繰り返し同じことを考えていた。

何故あのとき私はあんなにカッとしたのだろう。夫は何故あんなつまらない言い争いで家を出てしまったのだろう。口喧嘩など珍しくない。一、二時間もすれば大抵どちらかが折れるか、なんとなく仲直りをして後まで引きずることはなかったのに。

あの夜は一睡もできなかった。

交通事故にあったのではないか、暗がりで見られたのではないか、具合が悪くなってどこかにたおれているんじゃないか、朝になっても帰ってこなければ警察に問い合わせしてみよう。

翌朝、知樹を学校に送り出してから、思い切って会社に電話をすることにした。入社していれば無事が確認できる。

「恐れ入りますが、営業の北村肇さんをおねがいします。こちらは井上と申します」章子は家族と悟られないように旧姓を使った。

「北村は四月三十日をもちまして退社いたしました。どのようなご用件でしょうか。よろしければ後任の者がお伺い致しますが」

章子は耳を疑った。

「北村...肇...さん...お辞めになったんですか？」

「はい。どういったご用件でしょうか？」 再度聞かれて章子はあわてた。

「あ、いえ、あの結構です」

しどろもどろに答えて章子は受話器を置いた。

肇が会社を辞めていた。本当だろうか。でも何故？

何も聞いていない。一体何があったのだろうか。

混乱する頭を抱えて、その場にしゃがみこんだ。

肇は隣のA市にある中堅の薬品卸売会社に勤めてもう十年になる。社長からも目をかけてもらって、会社の景気も悪くないはず。辞める理由などない。

仕方ない、嫌だけれど何かわかるかもしれないから肇の実家に電話をしてみよう。章子はもう一度受話器を取り上げた。

呼び出し音が十回を数えたとき、やっと電話が通じた。

「あの、章子ですが」

「ああ、肇のこと？」義母の冷たい声が耳に痛い。

「そちらに行ってますか？」

「ええ、来てますよ。何があったか知らないけれど、肇はしばらくこっちにいるそうよ」

「今そこにいるなら、電話に出て欲しいんですけど」

「いませんよ。そのうち本人が連絡するでしょう」そう言うなり、義母は唐突に電話を切った。

誰もいない部屋で、置いてあった新聞紙を放り投げ、テーブルに突っ伏して激しく泣いた。

どんなに待っても、肇から連絡はなかった。電話をしても本人は出ない。いたとしても取り次いでは貰えなかった。

ひと月ほどの混乱と怒りと悲しみの日々を過ごして、苦しくはあったが章子は現実を見つめられるようになった。

夫はただ私と別れたかっただけかもしれない。きっかけを探してただけで、私が投げた喧嘩にチャンスとばかり飛び付いたのだ。

玄関の鍵も、車のキーも持って出なかった。ここに戻るつもりはないのだろう。浮気をしていた可能性もある。全く気付かなかった。結婚して八年、仲の良い家族だとばかり思っていた。なんて鈍い私。

はっと気がつくと、知樹はまだゲームに夢中だった。

「いいかげんにしなさい。宿題はないの？」

「ないよ。ね、もう少しいいでしょ。明日返さなくちゃいけないんだ」

「じゃあ、あと少しだけね。九時になったらお風呂に入って寝るのよ」

「九時じゃ終わんないよ。九時半まで、ね、いいよね」

「しょうがないわね。ほんとに九時半までよ」 殆ど上の空で答えた。

夫はどうして知樹まで捨てることができたのだろうか。あんなに可愛がっているように見えたのに。参観日に来てほしいと頼んでもきっと無駄だ。知樹にも本当のことを話すしかない。そろそろ団地や学校でも噂になっているようだ。知樹を悲しませたくないけれど仕方ない。

これからの生活のこともある。仕送りは望めないし、生活費は貯金を取り崩して賄わなければならない。

知樹の参観日には頼めば実家の父が出てくれるだろう。心配はかけたくないけれど、知樹を抱えて自分一人では心もとない。

両親に相談しなければならないことが頭の中を駆け巡っていた。



今にも雨が落ちてきそうな濃いグレーの空を気にしながら、デパートで買い求めた子供服やブランド品の紙袋を両手一杯にぶら下げて、篠原恵理子は井の頭線の改札口へ急いでいた。

二歳になる娘のルミを実家の母に預けての久しぶりの気晴らしだ。ストレスは発散できたが、代わりに母が疲労困憊だろうと思うと気が急ぐ。

ホームに停まっていた電車に飛び乗ると、ほっと一息ついた。

昼下がりのこの時間、下りの電車は空いていた。座席に腰を下ろすと、先ほどからジーンとしびれている足の指を靴の中で動かしてみる。母の忠告に従ってもっと低いパンプスを履くべきだった。久しぶりのハイヒールは疲れる。

渋谷から急行でなくても十五分もあれば自宅のある西永福に着く。恵理子は駅から五分ほどの住宅街の一角に自分の両親と夫の慶一郎、娘のルミと一緒に生活していた。

恵理子の両親と同居することに、慶一郎は最初は難色を示したものの、出張の多い商社勤めでは留守も多く結局は同意したのだった。

心配していたトラブルもなく、思いのほかうまくいっていた。

門を開けると、つかの間の雨止みを狙って庭で遊んでいたルミが、駆け寄ってきた。後ろから恵理子の母の静子が小走りにルミを追いかけてくる。

「あら、お帰りなさい。掘り出し物はあった？」

「どれも欲しくて、目移りしてしまっ」

「まあ、ずいぶん沢山のお買い物なこと。疲れたでしょう、おやつにしましょうね」

「お母様も疲れたんじゃない？ ルミの相手で」

「今日のご機嫌が良かったから楽でしたよ。それより、適当なお洋服はあったの？」

「まあまあね。お母様のカードで沢山買ってしまったから、来月の請求書を見て驚かないでね」

「仕方ないわね。ルミちゃんのためですから」静子はルミにプリンを食べさせながら微笑んだ。

「私の物も一緒に買わせていただきました」と恵理子は首をすくめて付け足した。「ルミの幼児教室に来て行くお洋服も、いつも同じと言う訳にはいかないから、大変なのよ」

「貴女の小さい頃には考えられないことだわ。二歳で受験勉強だなんて」

「時代が違うのよ。良い幼稚園に入らなければ、良い小学校にも入れないんですもの。妊娠したらすぐお教室にご挨拶に行く方だってあるそうよ」

「馬鹿げているわね、こんな小さい子に何を教えるのかしら。しつけなら家庭で十分でしょう」静子はあきれたと言うように首を振った。

「しつけ以外に、知能テストの簡単なものもするのよ。色とか形とか判断できるように」

恵理子は一生懸命説明をする。何と言っても親に援助してもらわなければ、財政的に厳しいのだ。説明にも熱がこもる。

「そうそう、先生がおっしゃってたけど、動物も植物も、実物を見せた方がいいんですけど。さくらとかチューリップとかはどこにでもあるけれど、東京では動物や自然は無理でしょう？ だから今度箱根に連れて行こうかと思っているの。紫陽花もシーズンですもの。小田原で動物園に寄ることもできるし」

「紫陽花？ ルミに？」

「いやーね。紫陽花は私が見たいの。たまにはドライブもしたいのよ」

「あら、ルミにかこつけて貴女が遊びたいのね」

「いいえ、すべてルミちゃんのためです。ねえ、ルミちゃん」

恵理子はルミを抱きしめて頬ずりをした。

「私には、世の中が狂っているとしか思えないわね」ため息をつきながら、ルミの口周りを拭くと、静子はキッチンへ戻って行った。

二、三日後の夕食時、父母が外出していると気を狙って、恵理子は箱根行きを慶一郎に切りだした。

「今度の週末にルミを連れて箱根にいきたいの。ドライブがてら」

「そうだな、たまには気分転換にいいかもしれないね。土曜日でいいかい？ 次の日曜日は出勤しなければならないから」思いのほか、慶一郎は乗り気だった。

「休日出勤なの？」

「ああ、今、猛烈に忙しい。ここで認められるかどうかの瀬戸際だからね。月曜の会議の準備だから土曜日は一泊して、日曜日は十二時までに入社すればいい」

「よかったわ。とても行きたかったんですもの」

「一週間早い父の日ということで、君のご両親を招待したらどうかな。いつもお世話になりっぱなしだから」

昨日まで降り頻っていた雨もやんで、土曜日の朝は雲の合間から薄日が差していた。うきうきと出かける支度をしていた恵理子は「私たちの心がけがいいから、雨がやんだわ」と慶一郎に話しかけた。

「箱根は降っているかもしれないよ。此処とは天候が違うからね」

現地で合流する予定の父をおいて、四人で慶一郎の車に乗り込んだ。少しくたびれた感じの車ではあるが、それなりに乗り心地は悪くない。東名高速、小田原厚木道路を経て早川口で降りるとすぐに小田原城址公園につく。そこでルミを遊ばせてから、箱根へ向かう。

その後、芦の湖で遊覧船に乗ると、既に日が傾きかけていた。予約を入れておいた旅館には、父の義之が先に到着していた。

「なかなか良い旅館じゃないか。慶一郎君に招待してもらうとは、くすぐったい気分だが嬉しいよ」義之は上機嫌で、ルミを抱き上げた。

飛び石の敷かれた外廊下を歩いて案内されたのは、一階の庭に面した二間続きの座敷だった。それに付随して三畳の控の間もある。

内風呂と温泉の外風呂があり、食事はひと品ずつ供され、熱いものは熱く、冷たいものはより冷たくと調理人の心意気を感じる料理だった。

「私は明日の朝は早く出てしまうので、お義父さんたちはゆっくりしてってください」慶一郎の言葉に義之は「大変だね」と答えながら、温泉へと向かっていった。

慶一郎は明日の会議への準備を終えると、内風呂を使い、柔らかい布団に横になるとすぐに軽い寝息を立てはじめた。



六月の第二日曜日、章子は白いコンパクトカーに知樹を乗せ、箱根で土産屋を営んでいる両親の元に向かった。

国道246号線から小田原厚木道路に入る。早朝のせいか、日曜日にもかかわらず道路はすいていた。しかしスピードは出せない。時速百キロもだそうものなら、すぐに覆面パトカーが後ろについてくる。

「前の白い車、停まりなさい！」と拡声器で指示されてはかなわない。

章子も何回か捕まって、国の財政にきよしている。こんなときにも罰金のことなど考えるんだわ、と独り苦笑いをした。

梅雨空も、章子の心の中の嵐も今日は一休みしていた。両親になるべく心配をかけないよう、メイクもいつもより明るく、服も迷った末に白いワンピースを選んだ。落ち込んでいるように見せたくない。

小田原西出口から一般道に合流する。家を出てから三十分もたっていなかった。

「まだ七時半だわ。おじいちゃんの家に行くには、ちょっと早過ぎるわね。箱根を少しドライブしてからにしようね」

「うん……」朝早くから起こされた知樹は、半分眠ったまま返事をする、また窓に頭を持たせかけて眼を閉じた。

章子は手を伸ばすとそっと知樹の髪の毛をなでた。椿ラインを通過して湯河原に寄ろう。そこで両親に何かお土産を買おうと、車をターンパイクに向け、速度を上げた。

早朝の空気は気持ちが良い。章子は少し窓を開け、外の風をいれた。

緑が眼に心地よく、しばらくの間心を空白にして前方の風景だけを見ていた。

「考えても仕方ないわ。なるようにしかならないんだから。私には知樹がいる」

気持ちを切り替えると、章子は少し楽になった。父母の前で泣かなくてもすみそうだ。今でも肇が帰って来てくれれば、と思う気持ちは変わらない。だが、いつ帰ってくるかわからない夫を待つ生活は、もう耐えられない。

ターンパイクが終わったあたりの大観山付近で、章子は一旦車を停めた。山の天気は変わり易い。あたりが暗くなり霧雨も降ってきた。

左をとれば湯河原へ、真っすぐ進めば実家のある箱根町へ通じる。天気の様子を十分知っている章子は実家へ向かうことにした。

霧雨はやがて本降りとなり、かなり視界を悪くしている。ワイパーが間に合わないほどだ。危険を感じた章子は車を路肩に寄せた。雨が小ぶりになるのを待とう。こういう時は動かない方がいいのよ、と自分に言い聞かせ、ハザードランプを点滅させた。

「お母さん、どうしたの？」目を覚ました知樹が心配そうに聞く。

「雨が凄くて前が見えないから、少し待とうと思って停まっているの。まだ寝てなさい。お母さんはトランクから三角板をだすから」

「ぼくも手伝う」知樹は助手席のドアを開けた。

「ダメ！ 危ないから車の中にいなさい」

運転席のドアを開け、車の後部へ廻ろうとしたとき、知樹が母親のそばへ駆け寄ってきた。その時、ヘッドライトの鈍い光が、雨の向こうから突然章子の目の中に飛び込んできた。



早朝に目を覚ました慶一郎は、六時から利用できる温泉に入ることにした。誰もいない露天風呂で手足を伸ばし、立ち昇る湯気と頭上の青空を見上げ、心も体もほぐされていくのが感じられた。

風呂からあがり、浴衣に着替えて脱衣場をでると、味噌汁をサービスしているコーナーがあった。

「あさりのお味噌汁です。よろしかったらお召し上がりください」と勧められるままにお椀を受け取る。

胃に染みいる朝の味噌汁は絶品だった。

「味噌汁か……。久しぶりだな」

パンとコーヒーのいつもの朝食に特に不満はないが、何か懐かしい感じがした。

体の火照りをさまし、妻を起こさないようにそっと身支度すると従業員に見送られて旅館を後にした。

少し霧雨がふっている。箱根町から小田原に出るにはターンパイクが一番早いと考えて、慶一郎は大観山に向かって車を走らせた。

大観山まではのぼりだが、その後は下りになり小田原まではすぐだ。雨が酷くなってきたようだ。このルートを撮ったのは失敗だったかなと思う間もなく窓に当たる大粒の雨で、視界も悪くなってきた。ゆっくりと車を進めながら、慶一郎は思案していた。

しかし、十五分も走ると下り坂になり、雨も小ぶりになってきた。だが、あたりの風景から察すると湯河原へ向かっているようだ。また土砂降りの中へ戻るのは気が進まないか、車をUターンさせ、来た道に戻り始めた。どうやら三差路で道を間違えたらしい。真っすぐ小田原へ向かったつもりが、右へ曲がってしまったようだ。

ターンパイクには向かわず箱根町のある湖畔へ真っすぐ降りようと決めた。

ヘッドライトとフォグランプを点灯させ大観山までもどる。左に道を取り遅れを取り戻そうとアクセルを踏み込んだ。視界は四、五メートルほどだろうか。左側に雨のカーテンで遮られたかのように白くぼんやりとした形が見えた。人と車だと気付いたのは、目の前に迫ってからだった。

慌てて脇をすり抜けようとハンドルを切った途端、鈍い音とともに白い人影が宙に舞い上がった。続いて左車輪が何かに乗り上げたようだ。

慶一郎は車を急停車させると、恐る恐る白い物体に近づいた。

白いワンピース姿の女性と、小学生と思われる男の子がうつ伏せで倒れていた。車を見られたかもしれないとパニックに陥った慶一郎は、側溝のそばに落ちていた大きな石を持ち上げると、女性の頭に振り下ろした。

凶器に使った石をトランクに入れ、慶一郎は車を発進させた。

急いで逃げないと。

ハンドルを握る手が汗ばんでいる。

額から汗が滴り落ちる。

早くこの場所から離れたい。

箱根町に着くと、湖畔にある駐車場に車を乗り入れ、ハンドルに顔を埋めて大きく息をした。女性が死んだのは確かだが、男の子はわからない。バンパーや車の左前方、ドアの辺りはかなり凹みが目立つ。ここに長居は無用だ。雨は既に止んでいる。

頭をフル回転させて、慶一郎は今後の対策をたてた。

家族や会社に知られてはならない。警察に捕まらないようにするにはどうすべきか。箱根新道に進路をとって小田原に向かう途中、凶器の石を濡れたタオルで拭くと崖の下に放り投げた。

なるべく混んでいる料金所のゲートに並ぶようにして、小田原厚木道路、東名高速道、首都高速道を通り、都内に戻ってきた。

ここはもう警視庁の管轄だ。警察は縄張り意識が強いと聞いている。神奈川県警からはとりあえず逃れられた。三軒茶屋を通過したころから、慶一郎は決心していた。

車を潰そう。日曜日の都心は空いている。うまくいくかもしれない。いや、成功させるのだ。

渋谷出口から一般道に出る時、左側から車が来ていないことを確認、また歩道に人が歩いていないことも確かめると、アクセルをふかし気味にして、慶一郎はガードレールに車の左前方を衝突させた。

ガーン。シューという音と共に車は半回転して停まった。その横をタクシーや軽トラックが用心深く通り過ぎていく。ちらちらと横目で見ながら、あのバカが何をやっているんだと思っているだろう。

口元に薄ら笑いを浮かべてバックシートに凭れかかった。

遠くからパトカーのサイレンが聞こえる。誰かしらせたのだろう。外を見ると、自転車に乗った制服の警官が窓を叩いている。

「大丈夫ですか？ 怪我はありませんか？」

「ええ、なんともありません」少々の怪我は覚悟していたが、悪運強いと言うか何も異常はなかった。車外に出て警官に免許証を見せる。

「かなり酷くぶつかりましたね。一体どうしたんですか。酒酔いじゃないでしょうね」

「いやー、急にめまいがして。何が何だかわからないうちにぶつかったんです」慶一郎はいかにも困惑していると言う表情を作って警官に答えた。

「病気だったらもう車を運転しない方がいいですよ。今回は人がいなかったから良かったけど、次には人身事故になるかもしれないですよ」

「本当にすみません、ご迷惑をかけて」神妙に頭を下げた。

車外に出てあたりをみまわすと、パトカーで到着した警官が交通整理をしていた。ぶつけたガードレールが曲げられたように変形しており、歩道側に倒れていた。

「レッカー車を呼びましたから、後のことは運転手に相談してください。それから自己証明を渋谷警察署に提出してください」

交通整理をしていた警官が無表情に慶一郎に伝えた。

やがてレッカー車が到着し、放棄と塵取りを持って降りてきた。警察とタイアップしている業者のようだ。ガラスや車の破片を丁寧に掃除すると、左側と前方が潰れた車を手際よくレッカー車に繋いだ。

「助手席に乗ってください」と顎で指示する。むかっときたが、文句を言える立場ではない。

「車はどこに運びましょうか。かなり潰れているので、廃車と言うことでしたら、このまま持っていきます。手間が一回で済みますので、料金も安くなります」

慶一郎にとっては願ってもない申し出だった。

「もうかなり古い車ですから、このまま廃車にしてください」

「では、大事なものがあつたら取り出してください」

慶一郎は愛車に戻り、床に転がっていた鞆と石を拭いたタオルを取り出した。

「請求書は後で送ります」と告げると、慶一郎をその場に残してレッカー車は走り去った。

警官もパトカーも既に姿を消していた。通りには何事もなかったのように、多くの車が行き来していた。

あっけなく事が済んだ脱力感を覚えた。

腕時計は12:00と表示されている。急いで会社に連絡を入れる。

「篠原です。事故にあつたものですから、これからタクシーで向かいます。今渋谷です。大丈夫です、詳しいことは後ほど」

近くのコンビニのゴミ箱にタオルを投げ入れると、慶一郎は片手をあげてタクシーを停めた。

* * * * *

叩きつけるような雨がシルバーの車をカーテンのように包んだ時、慶一郎の脳裏に十年前に自分の車で跳ね上げた白いワンピース姿の女性が浮かんだ。

フロントガラスの向こうから、まるでスローモーション映画のように運転席に向かって大きな石が落ちてくる。急ブレーキを踏む。ガラスの割れる音と目の前に迫る石。回転しながら激突した首都高速の壁が、慶一郎がこの世で見た最後の物だった。

「昨日の新聞見た？」

助手席の知樹が聞いている。肇はかすかに頷いた。父親からの返事がないのを知樹は気にせず言葉が続ける。

「怖いよね。何故突然石が飛んできたんだろう。信じらんない」

新聞は偶然が重なった事故と報じていた。

「世の中いろんなことがあるさ」

「かなり雨が降っていたって書いてあった。お墓参りを今日に延期して良かったね。昨日は箱根も土砂降りだったみたいだし」

「最初に箱根町のおじいちゃんのところに寄って、紫陽花を切ってもらおう。庭は今紫陽花の花の最盛期だそうさ。色も鮮やからしい」

「お母さんの好きな紫陽花を、あの事故の後、庭いっぱい植えたんだってね」

「一人っ子だったからな、母さんは」

十年前、箱根で事故にあったものの、知樹は脳震盪をおこしただけで命に別条はなくすぐに回復した。しかし、七歳の知樹には逃げ去った車の記憶が全くなかった。それが良かったのかどうか、肇にはわからない。

ひき逃げ犯人は十年経った今も不明のまま。肇は毎年この日には休暇を取って、箱根に行くことにしている。

事故の知らせを受けて箱根に来る間、肇には殆ど記憶がない。頭の中が真っ白になり体が震えていたことだけは覚えている。

警察で遺体となった章子を見たとき、床に崩れ落ちて泣いた。自分のせいだ、章子を死なせたのは自分だ。俺さえ家を出なければ、いまもまだ親子三人で平和な家庭を営んでいたろうと思う。後悔しても章子は戻ってこない。

肇が家を出たのは、家族には何の関係もないことだった。当時は、営業が集金の役目も担っていた。薬を卸した医院から集金して会社に納める。

ある日魔がさしたというのか、同僚に誘われて競輪に手を出した。最初は十万、次に二十万。気付いた時には六百万の穴を開けていた。請求書に不審を持った顧客が会社に問い合わせ、使いこみが発覚した。

警察沙汰にはならなかったが、当然のことながら解雇された。借金を背負ったまま。実家に泣きついて借金は何とかしたものの、章子には何と語り訳してよいかわからなかった。

章子にも知樹にも軽蔑されたくない。そして、肇は逃げ出したのだ。

新しい会社に就職できたら、その時は家に帰って章子に告白するつもりだった。だが、もうそれは叶わない。

小さな会社でもいい、雇ってくれるところがあったら就職して、知樹を一人で育てよう。

運転しながら、当時の光景がよみがえってくる。

「おやじ！ 何考えてんだよ」

いっばしの口をきくようになった知樹が肇の横腹をつついた。

「母さんのことを思い出してたんだ」

いつか知樹に真実を言えるときが来るのだろうか、その時知樹はどんな反応を示すのだろうか。

消えない後悔の念を抱えたまま、肇はターンパイクへ向かって車を走らせた。



-fin-